

もくじ

中学生の部

最優秀賞 輝く私の未来のために

優秀賞 直筆のエネルギー

優秀賞 救えなかった命

入選 今の「電力」と未来の「電力」

入選 食品ロスをなくそう

入選 今ある幸せが続くために…

入選 命

入選 バスケとの出会い

入選 世界を変えるフェアトレード

入選 英語の学習で大切なこと

入選 ボランティア

入選 平和を願って…

入選 正義と正義の共存を目指して

高校生・一般の部

入選 真の国際人になること

入選 日々思うこと

入選 疑うことの意味

入選 社会性について思うこと

大東西中学校 鈴木 芽依 ……

城南中学校 志村 小桜 ……

秀明中学校 柏木 美紅 ……

城南中学校 福田 萌 ……

城南中学校 高橋 未帆 ……

城南中学校 西形 日菜乃 ……

城南中学校 福島 妃奈乃 ……

大東西中学校 鈴木 光珠 ……

大東西中学校 中野 想士 ……

大東西中学校 中野 花美 ……

霞ヶ関中学校 渡邊 帆香 ……

霞ヶ関中学校 原 七海 ……

川越西中学校 成島 恒 ……

城西大学付属川越高等学校 丸山 尚起 ……

城西大学付属川越高等学校 林 暁翔 ……

城西大学付属川越高等学校 吉田 駿希 ……

城西大学付属川越高等学校 横尾 卓磨 ……

輝く私の未来のために

大東西中学校 2年

鈴木 芽依すずき めい

近年「働き方改革」の政策により、男女関係なく社会で働けるようになってきた。しかし、その一方で、ある新聞記事に目がとまった。記事の見出しは「亡くなった子 おなかに残し夜勤」というものだった。その女性は、職場の人員がぎりぎりですフトを急に変えられないという理由から、数日間、亡くなった子どもをおなかに残したままいつも通りの仕事に加え、残業そして夜勤も行ったそうだ。

「ありえない。ひどすぎる。」

記事を読み終えた私の感想だ。心の底から、ふつふつと怒りがわき上がった。お腹の子どもが亡くなっていると分かっているにもかかわらずはいけない女性の、胸の張り裂けるような想いを全く分かっていない。社会は女性の真剣な心の叫びをきちんと受けとめているのだろうか。そして、それを分かりあえる職場づくりはできているのだろうか。

私は将来、看護師になりたいと思っている。しかし、他にも夢がある。それは、明るい家庭を築くことだ。町を歩くとベビーカーをおして歩く、家族連れの楽しそうな光景を目にする。この姿にとっても憧れる。

しかし、この記事を読んで不安になった。「私が働くことになった時、もし子どもができたら、社会は許してくれるのだろうか。」と。今の日本はかつての日本より労働者が減っている。私は子育てを楽しみ、子どもが少なくとも小学生になるまでは社会復帰しない予定だ。でも目指すのは救命看護師。看護師としてキャリアを積むとともに、子育てという家庭内の大事な仕事と両立しなくてはならない。一生のすべてを仕事にかける人生、家族や家庭を大事にしていく人生、どちらの人生もすごく良いと思う。

では、仕事と子育てを両立したい人生の場合は社会とどのように付き合っていけばいいのだろうか。「働き方改革」の壁は、まさにここなのではないだろうか。

私は「働き方改革」の他に、妊婦や子育て中の女性対象の法律やきまりを作ったらいいのではないかと思う。例えば妊婦、母親は時短勤務、残業・夜

勤をしないというきまりを作り、その事を記入した書類を企業はもちろんのこと、市や県が把握する。それに加え、これは女性に限らず企業が定期的に「自分が働き続けられる環境か」についてアンケートなどを行うことで、自分の仕事に自信を持ち、職場が更に充実していくのではないか。また、子どもをもつ女性への理解を深めるために、国がハラスメント防止のビデオを製作し、一年に一回程度鑑賞するのはどうだろうか。

今の日本は出生率が低下している。このままだと国は衰退していくといわれている。その一方で、子どもへの理解が浅く、冷たい社会に思える。国民の一人ひとりが幸せな人生を送るには男性、女性そして、子ども、高齢者、それぞれの世代に対しやさしく、思いやりのある気持ちが必要なのではないか。

「保育園落ちた日本死ね。」

以前、この書き込みが話題となった。しかし、あの時と、今の日本は何か変わったのだろうか。私は大きく変わったとは思えない。女性たちが直面する問題はまだまだたくさんある。しかし、少しずつ女性に対する社会の対応は変化してきているようにも思える。

当然のことだが、時間が止まることはない。将来、私たちは大人として社会で働く。そして、現在働いている人は高齢者となる。私たちが日本を支える立場となったときには、本当の意味で女性が活躍し、子どもが社会の宝物となっていてほしい。労働者の全員が自分の仕事に誇りを持ち、働くことが楽しいと思える職場が私の理想だ。

未来の自分へ

今の社会は過去のあなたが望んでいたものに近くなっていますか。あなたの人生がきらきらと輝いていることを心から願っています。

◆ 優秀賞 ◆

直筆のエネルギー

城南中学校

3年

志村 小桜
しむら こはる

今年、私は誕生日に色紙をもらった。それは、部活の仲間からのものだった。一人の後輩の考案で完成したというその色紙は、同年代からのメッセージで、全て直筆だった。

私は、その色紙を見て、とても感動し、うれしくなった。色紙の中に、いつもサッパリとしていて、感情を表に出さない子の柔らかい字体のメッセージや、仲の良い友達からの冗談まじりの笑いの絶えない絵文字のメッセージ。普段口数が少なく、穏やかな男の子の優しい字で色鉛筆で描いた絵も添えてある、彼らしいメッセージなど、様々な想いがつまっていた。私は、「ありがとう」という想いで胸が一杯になった。

文字には、人それぞれの個性が出ると私は思う。小さな文字、堂々とした大きな文字、サラサラした文字、力強い文字など。文字でその人がどのような人なのか、どんな気持ちなのか分かる気がする。

しかし、現在の社会では、直筆のものより活字のものを多く見かける。直筆に比べたら活字は便利だ。機械により、文章の打ち直しが何度でもできる。また、誰が打つても同じものが印刷でき、相手に用件をしっかりと伝えることもできる。人に伝える手段としては、それで十分だ。だから、「直筆は面倒」と思われてしまう。確かに昔は直筆しか伝達手段がなかったのだから、現代からしたらわざわざ書くのは面倒と思うのは当然だろう。だが、面倒なことだからこそ、懐かしさを感じたり、愛着がわいたり、良さが出るのだ。

だからこそ、私は直筆の良さを大切にしたい。直筆は、活字にはできない、人の心を伝えることができるから。

例えば、今回私がもらった色紙。この色紙が全て活字だとしたら、私はあそこまで感動しなかっただろう。一人一人の手で書かれたものだから、想い

が伝わって、感動を呼びおこせたのではないか。であれば、筆字はどうだろうか。明らかに活字ではできないものがある。

私の家では、今年の元旦から一年の目標を色紙に漢字一文字で筆を使って書くことを始めた。できた作品には、「挑」を元氣よく書いて、挑む態勢を表すものや、「待」を太く丁寧に書いて、見守る姿勢を表すもの。父の場合は「怒」を逆さに書いて「怒らない」と掲げるなど、それぞれのいろいろな想いが込められた作品となっている。

このように、人が自分で書くことによつて想いが込められ、その字が生きてくる。同じ字を書いても、人によつて違った字ができあがる。また、文字を通して、見る人に感動を与え、勇気づけることができる。

人が書いた「直筆。」これには、活字にはできない、人に伝えるエネルギーが秘められている。

今、誰もがスマホを持ち、インターネットが簡単につながるといった環境で、直筆は使われなくなりつつある。私たちはもつと、「自分の字」を、「直筆」を大切にすべきではないだろうか。便利な物に頼らず、大切な事は自分の字で伝えるべきだと私は思う。

自分の字は正直で、素直な気持ちがまっすぐ伝わる。字が上手いか下手かは、関係ない。

これから、感謝する時、気持ちを伝える時、想いを伝える時と、様々な「時」がやってくる。そうした時、私は、直筆で相手に気持ちを添えて、伝えたい。また、伝えられるようにしたい。そのために、自分の字である直筆を日々大切にしていきたい。

◆ 優 秀 賞 ◆

救えなかつた命

秀明中学校

3年

かしわぎ
柏木 美紅

「もうおねがい ゆるして ゆるしてください」ノートにつづられていた五歳の少女の反省文。一日一食しか口にできない日も。それも、私達が食べているような食事とは程遠いものだったに違いない。毎朝四時頃に起きて、平仮名を書く練習をしていたなんて、それだけでもすごい事なのに、覚えた文字で両親に対し悲しいメッセージを書き残し、亡くなった。その少女の名前は結愛ちゃん。どんな思いを込めてつけられたか分からないが、字面からすれば「愛を結ぶ」、いわゆるキラキラネームである。一番身近な家族からの愛情をまともに受けられないまま、五年という短い生涯をとげた。

事件の発覚が、張本人である父親の「娘が数日前から食事を取らず、心臓が止まっているようだ。」との一九番通報だったと聞いて、私は強い憤りを覚えた。両親は数か月前から結愛ちゃんに十分な食事を与えることなく栄養失調にさせ、衰弱、嘔吐を繰り返していたのに、虐待の発覚を恐れ、病院を受診させず放置した上、父親は殴る、蹴るを続けていた。子供が勝手に開けないように冷蔵庫の前に障害物を置くなどしていたらしく、結愛ちゃんの体重は死亡当時、同年代平均の約二十キロを下回る十二・二キロ。免疫にかかわる臓器も委縮し、五分の一度にまで。やせ細ってあばら骨が浮き立った状態だったそうだ。体力が落ちた中でも、毎朝四時前に一人で目覚まし時計を使って起きては反省文を書かされていた。従わなければ、父親から暴力を振るわれていたというが、できてもできなくても暴力を受けていたと私は思う。うっぶん晴らしのための道具にしかな過ぎなかつたはずだから。

父親は香川で二度も傷害容疑で書類送検されながら不起訴になっていた。その度、児童相談所で一時保護をされているながら、帰りたくないという結愛ちゃんへの願いは届かず、親元に帰されていた。戻ったところで、結愛ちゃんへの接し方が変わるとは到底思えないのに。何故子供でも分かりそうな結果が予測できていたのに、児童相談所や家庭裁判所、警察へとつながらなかつ

たのだろう。香川から東京へ引越した際もきちんとした引継ぎがされて当然の悪質なケースだったはずなのに、結愛ちゃんとの面会すらも母親から拒否されたまま引き下がっていたなんて、専門に仕事をしている人達なのに：あり得ない。私だったら、拒否されていること自体が危険だと思って、警察を伴って緊急保護も考えたと思う。それぞれの部署の詳しい決まり事は分からないが、どこかで面倒だとか、どうせ変わらないと決めつけ、動こう、動かそうと思っていないのかもしれない。平成二十九年、全国の警察が児童虐待の疑いがあるとして児童相談所に通告した件数が約六万五千件。事件化した被害者が千百六十八人。その内死亡した子供が五十八人だという。表面化しているにもかかわらず救えなかつた命があるなんて：おかしい。

先日の台風被害で、実家の片付けの最中に懐かしい思い出の品が出てきた。結愛ちゃんと年が同じ頃の私が両親に宛てた手紙などだ。楽しかったり嬉しかったりという思いが伝わる内容だった。

「ごめんさい ゆるして これまでどんだけあほみたいにあそんだけあそぶってあほみたいだからやめるから ぜったいやくそくします」毎日明るい笑顔で遊ぶのが当たり前の年頃にして、それが許されず、人に助けも求められずにいた結愛ちゃんの苦しさは計り知れない。私は未だに約束を守れなかつたり、一人で目覚ましで起きれなかつたりする時もある。私がこの親の元に生まれていたら、と考えると、本当に辛くて胸がえぐられそうになる。

日本は今、少子化問題を抱えているが、親の責任を果たせないのなら、親になるべきではない。一人でも尊い命が奪われず、人間らしく生きられる世の中であつて欲しいと願う。

◆ 入 選 ◆

今の「電力」と未来の「電力」

城南中学校

2年

福田 萌 ふくだ もえ

「越の国 燃ゆる水を献ず。」日本書紀には飛鳥時代、越の国から天智天皇に石油が献上された記録が残っている。このように、古くから石油が取れていて、新潟県は今も石油の生産量日本一を誇り、国内に石油の供給を続けている。だが、日本の石油自給率は1%にも満たない。さらに、長年の主力エネルギー源として利用するが、必要な石油のほとんどは中東からの輸入に頼り、安定的なエネルギーの確保ができていない。天然資源である石油は、あと五十年で枯渇すると言われているので、今後、エネルギーをどう確保していくのかと私は疑問に思った。

一九六〇年代以降の日本のエネルギー需要は急速に増え、主力だった国産の石炭に代わり、価格の安い石油が中東から輸入されるようになった。また、自動車の急速な普及により、日本で必要とするエネルギーに占める石油の割合は、一九七三年度には七五・五%に上った。そこで日本は、「脱石油」へ転換した。脱石油のきっかけとなったのは、その年に第四次中東戦争が勃発し、「第一次石油危機（オイルショック）」があったことと、その六年後「第二次石油危機」が起きたことである。

しかし、二〇一一年の東日本大震災で状況は一変した。減少傾向にあった石油の割合も再び増加し、現在も四〇%近く占めている。また、日本が輸入する石油は今も「中東頼み」のままである。二度の石油危機を経て、「中東依存度」が八七年度には六七・九%まで下がったのだが、二〇一六年度には八七・二%に上がり、石油危機の頃の水準より高くなってしまった。

そこで私は、「脱炭素」をオススメする。脱炭素とは、化石燃料に依存せず、地球温暖化防止を進める計画である。世界でも、「パリ協定」で今世紀

後半には、温室効果ガス排出を実質0にするという目標を一九〇以上の国・地域のすべてに求めている。私が今、期待しているのは「再生可能エネルギー」である。再生可能エネルギーは、空気や水を汚さずに電気を生み出せる自然エネルギーのことで、太陽の光や熱、風力、水力、地中の熱などだ。現在発電力量に占める再生可能エネルギーの割合は、日本は7%であるが、ドイツは二七・七%、スペインは二五・二%とすでに利用が進んでいる国があり、ドイツでは二〇二二年までに原発をすべて止め、再生可能エネルギーにしようという計画がある。

しかし、世界のエネルギー消費量は増え続けている。今後、途上国であるアジアを中心に増加することが予想される。このまま石油に頼り続ければ二酸化炭素の排出量が増えてしまうに違いない。

日本の脱炭素の目標として火力発電の割合を減らし再生可能エネルギーの発電を増やそうという目標がある。二〇三〇年発電方法のうち、再生可能エネルギーは、二二〜二四%を目指している。今増えているのは、太陽光や風力だが、いくつかの課題がある。一つ目は、広い大地が必要なこと。二つ目は、天気や時間に左右されること。三つ目は、値段が高いということだ。

しかし、私はこう思う。火力発電で使われる石油は五十年で無くなると言われているから、自分たちだけ便利に生活すれば良いと考えず、電気代が高くなっても再生可能エネルギーの発電所を増やした方が良いと思う。また、これからも電力がどうあるべきなのか、考える必要があるのではないだろうか。

食品ロスをなくそう

城南中学校

3年

たかはし
みほ
高橋 未帆

「日本は、一人あたりお茶碗約一杯分の食べ物が一日に捨てられている。」果して今、このことを、この現状を受け止めて生活している人は、どれだけののだろうか。このように、日本では一年で売れ残りや食べ残しなど、本来食べられたはずの、つまり、「食品ロス」が約六三二万トンも出されている。そしてこの六三二万トンという数字は世界中で飢餓に苦しむ人々の食糧援助量の二倍にも相当するという。

日本はスーパーやコンビニなどに行けば、必ず何か食べ物がある。それが日本人にとって、ごく当たり前のことである。一方、アフリカなどの貧しい国々では、お茶碗一杯の食事にありつけるか、ありつけないかという現状が存在している。日本人にはありえないような現実があるのだ。しかし、これは私たちが住んでいる世界、地球で起こっている問題なのである。

では、私たちはこれからどうしていかなければならないのか。食品ロスを減らしていくためにはどうしたらよいのか。

私が大事だと思うことは、「食品を無駄にしない。」という気持ちを持つこととそれを行動に移していくことだと思う。物事を変えていくためには、「人言われたから。」「なんとなくみんながやっているから。」という曖昧で中途半端な気持ちではなく、自分から食品ロスを減らしたいという気持ちがとても重要だと思う。そして行動にしていくなのだ。

具体的には、食材を「買い過ぎない」、「使い切る」、「食べ切る」、この三つである。

食品ロスは、食べ残しだけではなく。買い過ぎて腐らせてしまったり、傷んで捨ててしまったものなども含まれる。ただ、食べ残しを減らすだけではなく、計画的に食べられる分だけを買うなど、買い過ぎて食べられずに捨てることを減らすのにも必要だ。

また、私は、この問題を調べていく中で、改めて大切だと思った言葉がある。それは、「もったいない」だ。「もったいない」という言葉は日本独自の考え方ということを知ることがあるが、今はその考えが薄れてきているように感じる。そこで私は、今こそこの言葉を思い出すべきだと思う。この言葉を考えていけば、先に述べた行動につながっていくだろうし、更に食べ物を大切にしようという行動も生まれていくだろう。

「もったいない」は食品ロスだけでなく、地球で起こる様々な問題も解決するきっかけになると思う。

そして、何よりも一つ一つの問題を自分のこととして捉え、解決していくという姿勢が一番のきっかけであり、一番大切にしなければならないことを忘れてはならない。そういう姿勢や小さな努力、積み重ねが地球を変えていくのだ。「今」は逃してはならない「変わる」チャンスである。もう一度今の生活を見直してほしい。地球の未来は、私たちの手にたくされているのだから。

◆ 入選 ◆

今ある幸せが続くために…

城南中学校

3年

にしがた ひなの
西形 日菜乃

「ドーン」人類を一瞬にして、地獄へ突き落す音が聞こえてくる。このような事が、いつ起きてもおかしくない世の中に、私達は生きている。核兵器、それは冷戦後、最も危険な遺産だ。

今日、世界では様々なニュースが取り上げられる。その中で、いつの時代になっても消えないものがある。それが、核兵器問題だ。世界には、いくつの核があるのか、知ってるだろうか？約一万五千個も存在する。これらの核兵器を、唯一落とされた被爆国が日本だ。

一九四五年八月六日、広島。九日、長崎。私は、当時の原爆投下前後の様子が気になり、詳しく調べてみた。八月六日の朝、人々は朝食をとったり、仕事へ出かけたりと一日を始めようとしていた。すると、突然放送が流れた。「中国軍管区情報、敵大型三機、西条上空を」と、ここまで読み上げた瞬間、大地を切り裂くような音と同時に、建物が傾くのを感じ、体が宙に浮き上がった。そして、投下から約四十秒後、上空で目がくらむ閃光を放ち炸裂した。爆心地周辺の地表面の温度は四千度を越え、まるで小型の太陽のようだった。原爆による主な被害は、大量破壊、大量殺戮が瞬時に、また放射線による傷害が、その後も苦しめ続けることである、と書かれていた。私はこれを読んだ後、言葉を失った。いつもと変わらない日常が一瞬にして、地獄の風景へと変貌する恐ろしさに胸がしめつけられた。それと同時に、このよくな出来事が、今世界中のどこかで起きたら、どうなってしまうのだろうか？大きな不安が心を過った。

世界でたった一つの被爆国だからこそ、私達は核兵器の恐ろしさを伝えて

いかなければならない。それは、どんなに些細な事でもいい。一人一人が、核の恐ろしさを心に留めておくだけでも、集まれば大きな力となる。

さらに、核兵器について演説をした大統領がいる。アメリカのバラク・オバマ前大統領だ。オバマ前大統領は、チェコの首都プラハでこのような演説をした。

「米国は、核兵器のない、平和で安全な世界を約束する。」と説いている。しかし、いくらアメリカの大統領が、平和を約束するといっても、一人で実行できることは限られてくる。オバマ前大統領はこうも言っている。

「兵器の拡散を阻止するために、世界は一緒に立ち上らなければならない。全ての国は、さらに強い世界的な組織を築くために、団結しなければいけない。私達は肩を組むべきだ。」と。やはり、一人が、団体がそれぞれの国が意識を変えなければ、世界を平和の道へと、導くことは出来ない。

それでも、世界から核兵器がなくなる姿を私達が生きている間に見ることは出来ないかもしれない。だが、今世界は動き出している。各国の首相が、会議や会談を開き核を減らす大きな一歩を踏み出している。この一歩が大切なのだ。この良い流れが世界を巻き込み、いつか平和な日が来ることを信じ、そして私達、未来を担う若者が、核の恐ろしさを、平和という幸せを伝えていくべきである。

世界の運命をつくるのは、私達なのだから。

命

城南中学校

3年

福島 ふくしま妃奈乃 ひなの

ある日、私が駅前を歩いていると一枚のチラシを渡された。普段ならすぐ
に捨ててしまおうがその日は違った。私はなにげなくもらった一枚のチラシを
見たとき膝から崩れ落ちるような強い衝撃とともに尋常じやない沈痛な思
いにかられた。その日、偶然もらった一枚のチラシが私の考えを大きく変え
ることになった。それは人間のエゴにより多くの動物が殺されているとい
内容のものだった。

私は、思った。なぜ人間の命も動物の命も同じ命なのに動物の命は軽くあ
つかわれてしまうのか。

私は、密猟など私利私欲のために動物を殺した人は、人間を殺した人と同
じように重い罪に問われるべきであると思う。イタリアのルネサンス期を代
表する芸術家であるレオナルド・ダ・ヴィンチの名言の中に

「動物を殺すことが人間を殺すことと同じように犯罪とみなされる日が来
るだろう。」

というものがある。私は本当に一刻も早くそのような日が実現するべきであ
ると思う。私は、人間を殺した人と動物を殺した人の罪の重さを同等にする
ことで今より動物の権利が保障されると思う。そうならば動物を殺す人が今
よりも減ると思う。そして、動物と人間が共存できる世界の実現にまた一歩
近づくと私は考える。

しかし、現在人間のエゴによって殺される動物は増え八十万から百二十万
種のうち五千種以上の動物が絶滅危惧種とされている。それだけでなく保健
所でのペットの殺処分が問題となっている。現在では五万六千匹もの尊き命
が失われている。

そこでこのような問題を解決する手だてはないのだろうか。

私は、この問題を解決するためには一人一人の意識の向上が大切だと思う。
一人一人がこの問題から目をそむけるのではなく、この問題を重要視し、多
くの人に今の悲惨な状況を知ってもらおうことでこの問題の早期解決につな
がっていくのではないだろうか、と私は思う。例えば、この悲惨な現状を隠
ぺいするのでなく、一人でも多くの人に現状を知ってもらえるように宣伝を
していくことや、浄財を募り一人一人の意識向上につなげていくことなどだ。
もし、多くの人が問題意識をもちこの世界を変えていきたいと望むならば、
それは暗い闇を照らす光となり問題解決への道しるべとなるだろう。まだ他
にも、殺処分を減らすためにペットの避妊につとめたり、飼いはじめたペッ
トは最後まで責任を持って飼い続けるなど、ペットを飼うにあたってのルー
ルをしっかりと守っていくことが大事だと思う。私はこれらの問題を産んで
しまったのは人間なのだから、これらの問題は人間が解決するべきであると
思う。いや解決していかねばならない。

私はこれからの日本において重要なのは、動物の現状を多くの人に理解し
てもらい、一人一人が問題意識をもち問題解決につとめていき、一日でも早
く動物の権利が保障される社会を実現させることだと思う。そしていつか人
間と動物が共存できる社会の実現につながっていったら良いと思う。そのた
めにも私は、自分に関係ないと思うのではなく、今自分にできることは何だ
ろうと考え、それが例え小さなことであっても行っていきたいと思う。
そして私は今、殺された動物に変わり人類を恨み続ける。そして私は今、
殺されたすべての動物のご冥福を祈り続ける。そして私は今、殺されたすべ
ての動物に感謝する。そして私は今、人類を代表して二度とこの悲しみをく
り返さないことをここにちかう。

◆ 入 選 ◆

バスケットとの出会い

大東西中学校

2年

鈴木 すずき

光珠 こうみ

「バスケットの体験に行きたい。」
妹が、母の前でぼそっとつぶやいたのが、私がバスケットを始めるきっかけだった。

小学六年生のある日、家族で夕飯を食べていたときのことだった。妹が友達関係でなやんでいたときに、新しいことを始めて新しい友達をつくりたいという気持ちを母にうちあげた。母は賛成して、夏休みに体験に行くことになった。

体験の当日、私は少し興味があつて、妹と一緒に練習を見に行った。私自身は、バスケットをやるという気持ちはなかったけれど、そのチームのコーチが、体験だけでもやってみたら、と言ってくれたから、練習に参加した。この日、私は初めてバスケットをした。実際にやってみると、すごく楽しかった。何回か体験に行くにつれて自分もバスケットがしたい、と思うようになった。そして、友達からの誘いもあつて、私はバスケットを始めことにした。

最初はなににもできなかったけど、コーチや友達に教えてもらつて、少しずついろいろなことを覚えていった。ドリブルの仕方、シュートの打ち方など、一から丁寧に教えてもらうことがうれしく、とても楽しかった。

しかし、練習は楽しかったけれどそのぶん辛いことや嫌なこともたくさんあった。たくさん走ったりすることも辛かったが、一番辛かったのは、みんなの練習についていけなかったことだ。私以外のみんなは、小学校低学年の時からバスケットをしている。私はみんなよりも遅くはいたので、走るスピードについていけなかったり、みんながあたりまえにできることがなかなかで

きなかったりした。何回もいやだな、と思つたし、みんなは、私が入つたことをめいわくを感じているかな、などとなんでも消極的に考えてしまったときもあった。

それでも友達やコーチがサポートしてくれて続けていくことができた。たくさん練習していくうちに、できることが増えて、もつとバスケットが楽しくなった。

やがて、中学校に進学し、私は中学生でもバスケットを続けることにした。陸上部に入るうかすこし迷つたけど、もつとバスケットが上手になりたいと思つて、入部を決めた。小学校の時と比べて、バスケット部の練習はすごく辛くなった。でも、先輩はすごく優しく、明るい部活だったから、今日まで楽しく続けてこられた。

今は、先輩が引退して、私たち2年生の代になった。部長、副部長もきまつて、新チームの練習も始まつて楽しみなことがたくさんある。でも、先輩がいなくなつて気が抜けてしまふ、部長や副部長に頼つてしまふ。一年生との関係なども含め課題や改善点がたくさんある。これから、いまある課題を解決して、今よりもっといいチームになればいいな、と思ふ。そのために、今自分ができることをいつも考えて行動していきたい。バスケットの技術面でも、私にはまだたくさん課題がある。それを改善しながら、できることをたくさん増やしたい。そして、少しでもチームの役に立てたらいいな、と思ふ。これから、今まで以上にがんばっていききたいと思ふ。

◆ 入選 ◆

世界を変えるフェアトレード

大東西中学校

2年

なかの そうし
中野 想士

みなさんは、「フェアトレード」を知っていますか？フェアトレードとは、発展途上国の原料や製品を先進国が適正な価格で継続的に購入することで途上国の生産者や労働者の自立を助けることを目的とした活動です。

今、世界の中で貧富の差が拡大する中、途上国の人々をどのように継続的に広く支援するかが課題です。その中で一般の人たちが気軽に支援活動に参加できるのがフェアトレードです。僕もクリスマスにフェアトレードで、タイの山岳民族の財布やチョコレートなどを父に買ってもらいました。

現在活動が広がってきているフェアトレードですが、どのようなところが継続的支援に良いのかというと、経済面です。途上国の人がカカオにこだわって生産して自国や先進国で売ったとしても、その努力に見合わない安い金額でしか売れないのだそうです。だから、生産者の人々は一生懸命働いても貧しくなってしまう、悪循環になってしまいます。

ところが、フェアトレードで売ると製品の価値に見合った金額が入るので、入ったお金で設備を新しくすることができるので、より良いものを作ることができます。また、子どもを学校に行かせることができたり、経済的に豊かになり、良い生活が送れるようになったりします。つまり、そこに暮らす人々が幸せになるのです。

しかし、活動が広がってきてはいるものの、発展途上国に住む人の人口は、世界人口の八割と言われているので、まだまだ十分とは言えません。僕ももっとこの活動が広がる必要があります。

発展途上国支援の募金も行われていますが、僕はフェアトレードの方が必

要なのではないかと思っています。もちろん募金も大事な活動です。しかし、募金で途上国の人たちにお金が入っても、それは一時的なことで、継続的な支援となったり、生産者が自立したりすることはできません。フェアトレードは、募金よりもっと広く多くの人（生産者・生産者の子・農園で働く人・その子どもなど）が幸せになると 생각합니다。だから僕は、フェアトレードは募金よりも効果的であると考えます。

そもそも、なぜ僕はフェアトレードのことを作文にしようと思ったかというと、テレビで普段僕たちが当たり前暮らしている生活とは違う途上国の生活を見て、衝撃を受けたからです。救える方法がないか、とインターネットで調べて出てきたのが、フェアトレードでした。しかし、恥ずかしながらも自分では活動したことがないので、これから活動をしたいと思っています。

僕には大きな夢があります。それは、将来会社を立ち上げて、途上国と日本の架け橋になりたいという考えです。これからの途上国の人口は、アジアやアフリカの人口爆発に伴い、さらに増えていくと予想されています。今よりもっと「自分にできること」が必要とされる時代がおそらく来ると思っています。

一人の力はとても小さく、七十四億人すべての人を幸せにすることはもちろん無理です。しかし、みんなが「自分にできること」を考えれば、幸せに暮らせる人が数千、数万、数十万、数百万と増えていくのではないのでしょうか。そんな活動を実践し、広めていけたらと思っています。

◆ 入 選 ◆

英語の学習で大切なこと

大東西中学校 2年

なかの はなみ
中野 花美

「高二になったらジャパントタイムが読める英語力をつけたい。」

これは、先日行った高校見学で校長先生が話していた中の一部だ。

私は英語がとても苦手だ。それは、日本語とは文法が全然違うし、単語の発音や意味つづりが分からないからだ。嫌だからと、テスト前でないと勉強しないし、その勉強は量が少ないので良い勉強とは言えなかった。だから、テストの点数は酷いものだった。それからさすがに危機感を覚え勉強したが、今でも単語を覚えるのが苦手なので、テストの点はあまり良くない。

私は校長先生の話を聞いてとても驚いた。私にとって英語を勉強する理由は、テストで良い点をとることだった。けれど本当に求められているのは英語を実用的に使うことなのだ。ジャパントタイムズを読むことだけでなく、英語の本や音楽、映画を楽しむことが今こうやって英語を学ぶ最大の意義なのだと感じた。中学生としては、テストや受験勉強に役立つ勉強をすることが大切だろう。それは、英語の基礎をしっかりつくる必要があるからだ。でもそれから先は、言葉のボキャブラリーを増やして、英語で異文化に触れることがタ大切になると思う。基礎が身につけば、応用の仕方は無限大だ。

そもそも日本の文化と英語圏の文化は深く関わっている。英語圏の文化が入る前の日本人は、魚を食べて和服を着ていた。今の日本人は、肉も食べるし、ほぼ全ての人が洋服を着ている。逆に、英語圏の人はフォークとナイフを使って食事をしていたが、今は箸を使うこともある。この異文化が混ざり合う過程には、英語の存在が大きかったと思う。英語が無ければ、今の日本

の文化はなかっただろう。そう考えると、今私達が英語を勉強することは、当然だと思える。

だから私は、英語をしっかり勉強して身につけたいと思っている。そのためにどうしたら良いか、英語の勉強法をインターネットで調べてみた。まず必要なのは、英語を聞くことだと多くのサイトで述べられていた。そうすることで、洋楽や洋画を翻訳することなく楽しむことができるようになるそう

だ。
次に必要なのは、話せるようになることだそう。私には英語が得意なお

ばさんがいるので、中一レベルのものから発音をトレーニングしてもらいたい。
次に必要なのは読めるようになることだそう。まず、英語の教科書や、英語で書かれた本を読んで練習したい。

そして最後に必要なのは書けることだそう。英語の授業で文法をしっかりと勉強して、家では単語の勉強したい。

この順番でやれば、英語が少しずつ身につくそう。よく考えてみると教科書はこの流れにそって書いてある。まずリスニング問題、発音練習して、本文を読み、本文の内容を書く。改めて教科書のすごさを感じた。

まだ私にはジャパントタイムズを読めるほどの英語力はない。だが、これからたくさん勉強して、高二になったらジャパントタイムズを読めるようになりたい。そして、英語で、さまざまな文化に触れたいと思っている。

◆ 入 選 ◆

ボランティア

霞ヶ関中学校 2年

わたなべ ほんかの
渡邊 帆香

私は今年の夏休みに保育園でボランティアを体験しました。私も保育園に通っていたので、保育園の先生達がどのように働いているのか、とても興味がありました。ボランティアに行く前は、とりあえず小さい子ども達と仲良く遊べればいいのかなあと思っていました。でも実際にボランティアに行ってみて、たくさんのお話を学びました。

私が特に感じたことは、子ども達にゆっくりと簡単な言葉で話すことが非常に大切だということです。先生達は、大人どうしの会話では普通の速さで話していました。でも、子ども達と話すときは、とてもゆっくりで、とても簡単な言葉を使って話していました。しかし、それは会話をするときだけではなかつたのです。絵本や紙芝居を読み聞かせするときも同じだったのです。私も読み聞かせを三回くらいしたのですが、なかなかゆっくりとしたペースで読むことができなくて、とても難しかったです。小さい子ども達はゆっくり話してもらわないと理解することが難しいので、ゆっくり話すということがとても大切なんだと気付きました。

ほかに、先生達は子ども達の様子を常に細かくチェックしていました。私がボランティアを体験した保育園では、子ども達が遊んでいるときの様子はもちろん、お昼ごはんやおやつをどのくらい食べたのか、お昼寝の時間にはときには何時くらいに寝たのか、しっかりと眠れていたのかなど、子ども達一人ひとりの様子をとて細かくチェックしていました。そして、小さな体調の変化にもすぐに気付いていました。先生達は常に子ども達の行動に目を配

らせていることが、とても良くわかりました。

また、私達が普段当たり前のようになっている、箸・スプーンの持ち方や、食器を運ぶなど食事の際の準備や片付け、トイレの使い方などを教えていました。私は、こういったことを全て親から学んできたと思手には頭の中で思っていました。本当は保育園でもたくさんのお話を教えてもらってきいたんだと思いました。

私はこのボランティアの体験を通して、保育士という仕事の大変さと楽しさを知ることができました。最初は楽しい仕事というイメージがあつたけれど、先生達はお昼寝の時間などの空いた時間にも、行事の企画などを作るためのパソコン作業や、子どもたちが作った作品を部屋に飾る準備などもしなくて、とても大変そうだと思いました。でも、行事などで子ども達が笑顔になつてくれたとき、達成感とやりがいを感じることができ、とても楽しい仕事だと改めて思うこともできる、とてもいい仕事だと思いました。

私は初めてボランティアを体験しましたが、初めての体験でこんなにやりがいのある楽しい仕事を知ることができて、とても良い機会になりました。そこで働く人達のお手伝いをするので、たくさんのお役に立てるようになるため、将来、自分にとってやりがいと楽しさのある仕事を見つけるためにも、いろいろなボランティアにこれからも参加して、多くの体験をしていきたいと思ひます。

最後に、お忙しい中、このボランティアの体験をさせてくださった保育園の先生方を、とてもありがたく思ひます。

◆ 入選 ◆

平和を願って…

霞ヶ関中学校 3年 原 はら 七海 ななみ

「あなたは、八月十五日は何の日か分かりますか。」

という質問に正確に答えることはできませんか。私は、十代後半から三十代の男女にこの質問をしているインタビュー映像に衝撃を受けました。画面に映し出された人々は、「山の日」「うなぎを食べる日」「肝だめしが始まった日」などデタラメな答えを話していて、なぜ答えることができず、笑っていられるのだろうかと思いました。正しく終戦記念日と答えた人は、半数を超えたものの五十四パーセントという少ない結果となりました。七十三年たった今だからこそ、真剣に戦争のことについて知らなければならぬと私は思いました。

なぜなら、今の日本で戦争を経験した七十歳以上の割合が約二十パーセントと少なくなっています。これは、戦争をまったく知らない世代が増えていくということです。だからこそ私たちはしっかりと戦争に向き合い、次の世代へと戦争の恐ろしさ、悲しみ、つらさを伝えていく責任があると思えました。それと同時に、起った出来事も知っておくべきだと思えました。

それは、広島・長崎の原爆投下です。これは、アメリカが出したポツダム宣言に対して日本が返事を返さなかったのがきっかけです。

最初に落とされた広島は八月六日、三日後の八月九日長崎に落とされました。この原爆の日を正しく答えられない人が七十パーセントととても多い結果です。落とされた広島・長崎県民だけが知ることではなく、国民は日本で生きている以上知らなければならぬことだと思えます。そして、唯一原爆

を落とされた国だからこそ、他の国に伝えられることがあると思います。核爆弾や原子爆弾のことについてよくニュースで流れているのを目にします。が、私は核をつくらない世の中になってほしいと思います。世の中から核、原子爆弾、戦争、紛争という言葉が消えてほしいと思います。二度と同じ事が起きないようにしていかねばいけないなと思いました。そのためには、私たちがしっかりと戦争のことを意識しなければいけないと思います。

私は、英語の時間に「かわいそうなぞう」というお話を学びました。東京大空襲の真っ最中の上野動物園の三頭のゾウのお話です。ある日、爆弾が動物園に落ちたら、危険な動物が逃げ出し、人々が危険だから動物を殺さないと命令され、心を痛ませながら、三頭のゾウを殺します。こうして、罪のない動物が殺されていきました。

このように、戦争、爆弾で、多くの罪なき人々、動物が亡くなりました。そして多くの悲しむ人々がいました。だからこそ、終戦の日、原爆の日は覚えていかなければいけないと思います。それを答えることができず、笑ったり、デタラメな事を話したりするのは、失礼だと思いました。だから次は、国民全員正確に答えられるように、そして、次の世代へとつないでいけるようにしたいです。生きたくても生きられなかった人のために、戦争は二度とやらない、起こさないと、私たちが生きて伝えなければならぬと思いました。日本の、世界の平和を願って。

正義と正義の共存を目指して

川越西中学校 2年 成島 恒なりしま こう

正義のヒーローが、悪役をやつつける。これは私たちが日ごろアニメやドラマなどでよく目にする「善対悪」の構図です。これらのアニメやドラマにいて登場する「正義」は一つだけ、それは主人公の考える「一番正しいこと」です。

私たちは幼い頃から、このような「一つの正義対悪」の構図を数多く目にしています。しかしその結果私たちの中に、「正義は一つである」という考え方もつとえば「自分だけが正義である」という考え方が生まれてしまっているように感じます。

このような考え方が生まれてしまう背景には、私たちが日ごろ目にする「一つの正義対悪」の構図を描くアニメやドラマの他に、学校などで複数の意見を一つに絞るために日常的に行われる「多数決」の方式も少なからず影響を及ぼしているように感じます。というのも「多数決」方式ではその名の通り多数派、マジョリティーが優先されるためマイノリティーの側の意見は結果的に「負けた」という印象になりやすく、そうなるとその意見は無意識のうちには「間違っていたもの」として認知されてしまうというケースが少なからずあるからです。このような状況を「善対悪」の構図にあてはめるとすると、「正しい」側のマジョリティーの意見が善、すなわち正義で、「間違っていた」側のマイノリティーの意見が悪ということになります。日常生活の中に「善対悪」の構図が生まれた訳です。

「自分だけが正義である」という考え方や、「一つの正義ないし善対悪」という構図からはいじめや差別が生まれます。そのいじめや差別となるのはたいてい、社会的にマイノリティーである側の人たちで、反対にいじめや差別を行うのは、社会的にマジョリティーである側の人たちです。マジョリティーである側の人たちは、常に周囲の大多数の人が自分と同じ「正しさ」

や「正義」の概念のもとに行動しているため「自分たちだけが正義である」とか「相手が悪である」といった考えになつてしまいやすく、相手の権利や自由を虐げることに対して何の罪悪感も覚えなないどころか、「そうされて当然」とまで思うようになります。

しかし人間の持つ権利や自由が虐げられてよいということは絶対になく、むしろそれらは守られるべきものです。そもそもこれらの権利や自由が虐げられる原因となつているのは「正義は一つである」という考え方です。私はこの考え方はよくないと感じています。というのも、正義とは「その人が正しいと信じていること」だと思っております。つまり全ての思想や言動が、必ず何かに対して正しく、そこに「間違い」など存在しないということです。よく考えてみれば、私たちが普段学校などで話し合いが行えるのも、自分と違う意見も全て正しいからだと思えます。もつと言えば戦争でさえも一方が正しくもう一方が間違っているのではなく、一方にとつての正義ともう一方にとつての正義がぶつかり合っているにすぎないのです。つまりその逆を考えると、相手の正義を理解すれば戦争はなくせるといふことです。

ここまで書いてきたように、私は正義とはとても多様性に富んだもので、人類が七十二億人いれば七十二億通りの正義の形があつていいはずだと考えています。たとえその中で多数派と少数派が生まれたとしても、一方がもう一方を否定し争い痛めつけ合うのではなくて、互いの正義を尊重し認め合つていけば、いじめも差別も戦争も、今すぐにも無くせるはずなんです。

たとえ今すぐには相手の正義が理解できなくても、私は理解しようとする努力はやめたくないですし、その結果としていつの日にか世界中の全ての人々の正義を理解していきたいと心から思っています。

◆ 入 選 ◆

真の国際人になること

城西大学付属川越高等学校

1年

丸山 尚起 まるやま しょうき

私は数ある教科の中で、一番好きな教科は英語である。理由は、中学一年生の時の英語の先生の授業がとても上手であり、英語の面白さにはまっぴりまったからである。そうして、私は中学生の間ずっと英語に触れていた。

中学三年生の三学期にはターム留学でオーストラリアへの五週間の留学プログラムがあった。英語は好きだったが、海外に行きたいという願望はなかった。日本を旅立つ日が近づくにつれて、「行きたくない」という消極的な感情が大きくなっていった。

ついに始まった、オーストラリアでの五週間。空港でホストファミリーと会い、私はすごく緊張していた。ホストファミリーの方たちは緊張している私に優しく話かけてくれた。だが、ネイティブの英語についていくことができず、何を言っているのか理解できなかった。空港から家までの移動時間もずっと話かけてくれたが、理解することができないため、話したくないと思つたこともあった。このままではいけないと思つた私は理解できないからといって諦めるのではなく、自分が理解できるまで説明してもらおうと思つた。ホストファミリーの方は一切嫌な顔をせず一生懸命伝えようとしてくれた。

オーストラリアでの生活も一週間が経ち、現地の学校生活も始まった。初日に学校で迷子になっていた時に、助けてくれた子がいた。その子は次の日から、リセスや昼休みの時間に私たちの所に来てくれて、たくさん英語の練習をさせてくれた。これを機に友達もどんどん増えていった。楽しく充実し

た日々はあつという間に過ぎて行き、日本に帰らなければならぬ日が来た。オーストラリアに来る前は「行きたくない」と思っていたが、オーストラリアを離れるときには「日本に帰りたくない」という感情が強くなっていた。現地で作れた友達とは、またオーストラリアで会うことを約束して別れた。五週間という短い期間であったが、すごく充実した日々を過ごすことができた。

オーストラリアにいる間、二月十四日にある女の子が私にチョコレートをくれた。日本では、二月十四日、バレンタインデーに女の子が男の子にあげることは普通であり、もらった時は何とも思わなかった。しかし、日本の当たり前と海外での当たり前は違うのかということを疑問に思つた私は、オーストラリアのバレンタインデーについて調べてみた。すると、オーストラリアでは、男の子から女の子に花束を渡すそうだ。その女の子は日本のバレンタインデーについて調べてくれたのだろうと私は思つた。

このように異文化を受け入れられるような広い心を持つことは大事だと思う。今、世の中はグローバル化が進んでいて、外国人と触れ合う機会も多くあるだろう。しかし、グローバル化が進む一方で、深刻な人種差別の問題は消えていない。人種差別も無くすためにも、異文化を受け入れられるような広い心を持つことは大切である。高校生である私に小さなことでも出来ることはある。平和な世界にするために、少しでも国際貢献できるように出来るように、出来ることから行っていきたい。

◆ 入 選 ◆

日々思うこと

城西大学付属川越高等学校 2年

林 暁翔
はやし あきと

今、僕が最も訴えたいことは、体育館に空調を付けるべきということだ。僕がこのように思い始めたのは小学校四年生くらいの頃からだ。ちょうど、その頃は、東日本大震災が起こったばかりの頃だった。今と変わらず異常なまでの暑さで多くの人が熱中症で倒れた。そんな中、福島等の被災地では多くの人々が避難所で生活していた。しかし、その避難した先にクーラーなどの空調があるはずもなく暑さに苦しんでいるとニュースで報道されていた。僕はそれを見て「あり得ない」と思った。せつかく避難してきても、その避難先で熱中症になり倒れるなどあってはならないと思ったからだ。避難所として存在するのなら、避難してきた人々が最低限、快適に暮らし、過ごせる場であるべきだと思う。ただ、今の日本の避難所ではそのような準備がされていないと思う。更に、多くの場合、避難所として使用されるのは地元の学校だと思う。普段から学校の体育館は多くの目的で使われている。授業の体育、集会、中学以降からは部活。最近では多くの学校で熱中症予防の目的で教室に空調が付けられている。しかし、体育館には付けられない。でも、一番熱くなるのは体育館で年々、運動部の人が熱中症で倒れることが多くなっている。僕はこの2つの事から空調の必要性を訴えたい。ただ、そこで

問題になってくるのが費用だ。たしかに、全国の体育館に空調を設置するとかなりお金がかかってしまう。僕の今までの意見は費用のことを考えず思ったことを書いていただけなのは確かだ。しかし、いくらお金がかかったとしても人の命には変えられないと思う。更に、空調設置における費用についてはお金を集めればいいと思う。日本は、どうしても地震が多い国なので、いつ自分が被災者として避難することになるか分からない。最近でも広島で川の氾濫が起きたばかりだ。いつ自分が被災するか分からない。このことを伝えればきっと募金に協力してくれない人などいないと思う。更に、設備の充実した場所でこそ学校教育は行われるべきだと思う。暑い中、普段運動をしていない学生が運動をしたらとても危険だと思う。僕は空調を付けることで人の大切な命が守られるという利点はあっても空調を付けることで生じる不利な点は費用以外特に無いと思う。僕はこれらの理由から学校の体育館に空調を付けてほしいと思う。

◆ 入 選 ◆

疑うことの意味

城西大学付属川越高等学校 2年

よしだ としき
吉田 駿希

「疑う」という言葉は一般的に考えて悪いイメージがある。それは当然である。相手を疑うことは、時として仲違いに転じる恐れがあるということに耳にしたことがある。だが、情報や常識を疑うことは、とても良いことではないだろうか。僕は疑ってみることを疑ってみた。

以前、僕はネットに掲載されていた情報をそのまま鵜呑みにして大きな失態を演じたことがある。以後、僕はその情報が本当に正しいものなのかを精査するようになった。また、その頃から、常識についても疑問をもつようになった。

常識を疑うことは、研究者や芸術家にとっても重要な能力である。ここでは、二十世紀のアメリカ人作曲家であるジョン・ケージを例に挙げて説明する。彼は、不確定性の音楽を元来の西洋音楽の伝統から逸脱させた「偶然性の音楽」の創始者である。これは現代音楽とよばれる、新たな音楽の一つである。現代音楽は、広義にはドビュッシー以後の二十世紀の音楽全体、狭義には第二次世界大戦後のさまざまな新しい傾向の芸術音楽をさすが、定義が非常に曖昧な上、様式によって区分されたものではなく、抽象的なことが特徴だ。しかし、従来の音楽様式を否定ないし更新した先鋭的な音楽であることは間違いない。彼の作品の一つである「四分三十三秒」は、無音という音楽を確立させた。これこそ、従来の音楽様式を疑ったものではないだろうか。ただ、この注意点は、従来の音楽様式を否定しているのではないし、

現代音楽を肯定しているわけでもない。なぜなら、両方とも独自の世界観があり、良さがあるからである。芸術家は常識がないという人がいるが、常識がないのではなく、正しい常識があるからこそ、常識を打ち破ることができるのである。

疑うからこそ見ることが出来る世界は、今現在見ている世界の何倍だろうか。それは自分自身でもできる。いわゆる見つけ直すことだ。自分自身を見つめ直すと、新たな自分を発見することができる。また、テレビ、ラジオ、本などの情報も、それが本当なのかどうかを調べてみるのもおもしろい。評論家やコメンテーターなどが毎回正しいことを述べているとは限らない。同じ人でも異なるテレビ局やラジオ局では、異なる説明をしているかもしれない。

だが、ここで重要なことは、疑い過ぎることは危険であるということだ。食べ過ぎ、飲み過ぎなど「過ぎ」る行為は思わぬ危険になりかねない。だからこそ、正しい常識を持たずして、疑うことはできないのである。

「疑う」ことは悪いことではない。むしろ逆である。疑うことを別の言葉で言い換えると、それは「興味」であり「知る」ことである。何が正しく、何が違うのかを「疑う」ことで「興味」を持ち、真実を「知る」こと価値は非常に大きい。常識を持って「疑う」ことは、真実を導く鍵なのだ。

社会性について思うこと

城西大学付属川越高等学校 2年

横尾 卓磨 よこお たくま

私は、日本人のほとんどが優しい性格であると思っている。電車が揺れて人と少しぶつかったとき相手は謝ってくれるし、公共の場で落とし物をしても大抵の場合誰かが交番に届けてくれる。ただ社会性については考えさせられることが二つある。

一つは便乗する人が増えたことである。国民性という見方もあるが、私は社会性でもあると思う。意見がしつかりとした批判ならいいと思う。それにくみ取って、次につなげることができる。しかし根拠も改善点もない、ただ自分の思った感情的なことだけをつづった、薄っぺらな批判だけを述べる人が増えたような気がする。インターネットが普及したこのご時世、ネットショッピングやアプリケーションなどを使う人も多いだろう。それらには「評価」というものがある。ネットショッピングで言えば商品を買った人がその商品を使ってみて感想を書き込み、「評価」をする。それが良かったという感想だけであれば、それ以上書く必要はないだろう。しかし、最近では「最悪だった」等の簡潔的な書き込みをよく目にする。このようなことは対象がモノだけでなく人でも起こっている。主に芸能人である。有名であるほど、失敗したときに薄っぺらな批判が殺到する芸能界は大変である。

二つ目は昭和の時のような、知らない人とても気軽に話せる状況を、最近

では見なくなってしまったことである。私はこの前テレビで、あるカメラマンの話聞いていた。その人は、「昭和の時は歌舞伎町で知らない人と話をしたり、その人の写真を撮ったりすることができた」と言っていた。しかし、今ではそのようなことができなくなっている。むしろ話しかけると気まずい雰囲気になるのがほとんどだろう。そのカメラマンが言っていたように、人間臭さがなくなってしまったのだと思う。今の時代でもいいところはあるし、今のほうがいいところもある。だが、昭和の時のようないいところがなくなっているのも事実である。私はその話を聞くまで、この社会性が当たり前だと思っていた。私は昭和の時代を生きていたわけでもないし、知らない人とはかかわらないように、と教わってきた。だからその話を聞いて、人間臭さのあった、温かかった昭和の時代に、少しうらやましさを感じた。

時代とともに社会性は変化する。私はどの時代が一番良かったかなどわからない。ただどんなことでも、新しいことをする前に過去のことを知るのも必要であると思う。何事も、当たり前だと思っていたことがすべてだとは限らないのだ。